ふるさとの民話　（第十六話）

『物貸しの神石』

昔、国下の」向かい山」というところに、「天から降ってきた」という大きな石がありました。それは、あまりに、りっぱな白い石だったので、村人たちは、神様が宿っている石ではないかと大切にしました。そして、時々、その石の前に集まって、お祭りをしていました。

あるとき、何年も日照りが続きました。そして、お米や畑の作物が、まったく穫れないときがありました。村人たちは、たいへん困って、明日からの暮らしにも、事欠くようになりました。

そこで、村人たちは、わらにもすがる気持ちで、この石の前に集まって、「どうか、私たちを助けて下さい。」と一心に、お願いしました。

次の朝、村人たちが石の前に来ると、不思議なことに、石の前には、お金や品物がたくさん置いてありました。村人たちは、大喜びで、この石から、お金や品物を借りていきました。

その翌年は、久方ぶりに、田畑の作物が、豊作になりました。そこで、村人たちは、その石に、去年のお礼をいって、借りていたお金や品物を返しました。こんなことが、何度か続き、いつしか村人たちは、この石を『物貸しの神石』と呼ぶようになりました。

ところが、よいことは、長く続きませんでした。この村に、一人の欲の深い男がいました。この男は、『神石』から、お金や品物を借りたいだけ借りて、それっきり返しませんでした。すると、『神石』は、怒って、それからは、もう誰にも物を貸さなくなってしまったということです。

また、『神石』が、怒ったため、美しい石の表面に、ぶつぶつができて、イボのようになってしまいました。そこで、村人たちは、この石を『イボ石』と呼ぶようになりました。このぶつぶつに、イボをこすると、不思議なことに、イボがきれいに取れるともいわれています。

この石は、国下町の日吉神社の境内に置かれています。

（国下町　伝承）

→